

## 篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ  
京都教育大美術科卒  
京都精華大学名誉教授  
(公社)日本漫画家協会参与  
FECO JAPAN 会長



## 老いは愛

高齢者の会話内容に幾つかのタイプがある。子どもの頃の想い出話とかかわいいものだが現役時代の自慢話を繰り返す人にはうんざりする。今飲んでいる薬の話や治療や大手術の自慢話には心が沈む。趣味や旅行の話は場が華やぐが筋肉自慢や下半身の話題でTPOの見極めが出来ない人は迷惑だ。未来の話題となると終活や墓じまいしかな

いというのも悲しい。介護の話はするほうからされる立ち場に移っていく。今回のメインタイトルをどうするかと色々ダジャレを考えてみた。老いと誠 老い燦 老いは勝つ 老いの讃歌 老いの奇蹟。眺めてみるとみんな『昭和』だった。どう抗ってみても団塊世代の匂いが満ちあふれる老い臭列車の中にいる。

# 年 輪

若い頃から老人をモチーフにした一コマ漫画をいくつも描いてきた。  
この作品は1998年にさいたまの国際漫画フェスティバルに出品し買い上げとなった懐かしい作品である。  
湯船に浮かぶ波紋を年輪に見立てたものだが、温泉には必ずと言って良いほど高齢者の常連さんが何人もいて、熱い湯に平気な顔して浸かっているのを見かける。そして彼らには若者はなかなか敵わない。



# 自転車婆さん

わが家のあるエリアは昭和四〇年代に開発された奈良市内でも落ち着いた一戸建てばかりの住宅街だ。坂道が多いので自転車で走るのは結構つらい。その坂道を毎晩自転車を押して歩くお婆さんがいる。その姿は遠くから見ると自転車だけが動いてくるように見えるのだ。  
実は腰が直角近く曲がっていて、その為

上半身が自転車に隠れているのだ。下り坂もその姿勢で自転車を押していたのでこれは彼女の健康維持のためのウォーキングなのかなとも思うが、深夜に腰をかがめ自転車を押して歩くお婆さんの姿はやはり異様である。  
ただ徘徊老人か健康婆さんか、ホントのところは定かではない。  
今夜も町内のどこかを歩いている。



沿線地図



刺青  
2025.9A

## 刺青

昔、桂文珍さんの新作落語に『ふりむけば老い』というのがあった。振り向く度に老いてゆくというシニールな話だが『振り向けば愛』と言う当時の映画タイトルに語呂合わせをしたモノだった。

当来るべき高齢化社会は当時の私にとってまだ遠い先の物語だったのだが喜寿を過ぎた今はリアルな実感がある。若い人たちがよく使う「お若く見えますね」も老人すべてに使う常套句と感ずるようになった。

電車の優先座席に座らない若者も増えたので私は躊躇せずに座ることになっている。

しかしヘルプマークをつけた人だけには反射的に席を譲る。

まだどこかで自分はいくらほど老人ではないという勘違いが残っているんだろうな。

# 夜空を飛ぶ

夢は見ないという人もいるが信じられない。起きた時には覚えていないというのが本当の所だろう。

私は毎日数本の夢をみる。真夜中に2〜3回目が覚めるので頻尿なのかもしれないが外出している時は6時間以上トイレに行く事はないからそこところはハッキリしない。

二度寝、三度寝はするので次はどんなストーリーだろうと楽しみになる。

バイオレンスやラブストーリー、家族の物語など多様だが最近とんと見ることがなくなってきたのが『空を飛ぶ夢』である。

昔、山田太一さんのシナリオ小説にそんなのがあったが、夢判断で調べると自由への願望や理想の自分への接近などというのに加えて性的な願望というのが出てきた。

あらためて自分の歳を確認しながら少し寂しくなった。



# 長老の想い

村に大きな問題が起こると村人たちは解決策を出すために村の長老に指示を仰ぐ。長老は「ワシが若い頃にもこんな事があってナア…」と昔の記憶や経験をもとに答えを出す。

古い映画でよく見かけたシーンだが今はどうだろう。

時代により切れない経営者や政治家は老害として扱われるし地域の高齢者たちは頼られるよりも見守られる立場となった。

『亀の甲より年の功』は昔からよく使われてきた言葉だが、高齢者が持っている熟練した技術や知識、多く

の経験は時代遅れのものとして見捨てられる事が多い。わからないことは何でもAが丁寧に教えてくれる。

『最近の若いもんは…』はいつの時代も使われてきた言葉だったが、今は『最近の年寄りには…』と言われる事のも多いのである。

